

2009.12
【第12号】



※ふるさとの会のメールマガジンをご愛読いただき、誠にありがとうございます。
今後もふるさとの会の活動内容を定期的に情報発信させていただきたいと存じます。

INDEX

1. 全体研修報告『さまざまな死に向き合うこと』
2. 平成21年度 救護施設福祉サービス研修会に参加して
3. 上野動物園にて
4. 大阪研修に行きました！

1.全体研修報告『さまざまな死に向き合うこと』

12月12日 講師に国立精神・神経センター精神保健研究所の竹島氏・川野氏・勝又氏を迎え、利用者の死と向き合わざるを得ない支援者側に焦点を当て、「さまざまな死に向き合うこと」と題した職員研修を実施しました。

始めに「NPOすまい・まちづくり支援機構」の水田代表理事より、「待つ」ということの意味を含めたふるさとの会を考える対人援助についての話があり、そして滝脇理事よりこれまでの支援過程で残念ながら自死に至ったケースの報告を行いました。それを受けてそれぞれ講師よりコメントを受けました。まずは竹島氏より、自殺が死亡原因の7位(若年層では1位)という現状があり、自殺が死因として珍しくなくなった。同時に、自殺者の6割が無職であり、かつ精神障害等の要因を十分に考慮する必要があることが確認されました。ふるさとの会の支援を行う対象者は多くの自殺リスク要因を抱えていることとなります。しかし、職員がその人を継続的に支えていくこと、本人が自分の気持ちを表現できるように生活を安定化させることが自殺の予防として重要な視点ではないかと竹島氏はお話くださいました。

川野氏からは心理学者の観点からコメントいただきました。自殺を企図する人間の傾向として、「体を犠牲にして頭を喜ばせる、体を粗末にする」行動があげられるが、そこでは、自らの体を粗末にするという理不尽さから、その人をなぜ助けなくてはならないのかという葛藤が支援者によく沸き起る。他人が信じ込んでいる事柄を理解するには相当な「手触り」が必要となり、そのためには共に言葉を交わし議論をすること、「声を重ねて豊かに」することが支援者にとっての手掛かりになるのではないかと、という視点を与えられました。

そして最後に勝又氏から専門的なサービスを提供する支援者の立場からコメント。支援をあれこれと行った末に利用者の自殺に直面し、自分には「何が出来たんだろう」と後悔する心境について触れました。利用者が亡くなった後もその人を想うことで関係性を継続していくというのが、支援者が新たな支援に向かっていく契機につながるのではとお話でした。

利用者がふいに口に「いつ死んでもいい」「生きていたってしょうがない」という言葉にどう答えていいか迷う事があります。しかし利用者とのやりとりから、ささやかに得られる満足感や小さな楽しみがあることも事実です。関わりの積み重ねで心が豊かになることもあるのか、川野氏の「声を重ねて豊かにする」という言葉が印象的でした。どのような形で利用者が亡くなっても心に重くのしかかるものがあります。利用者が残りの人生をどう生きるのか、援助者がどこまで寄り添い関わっていいのか、私たちの関わりが、その人の人生を左右してしまうのかと思うと、支援を担うことの意味を強く感じます。

(玉城綾子)



右から、竹島氏・川野氏・勝又氏



2.平成21年度 救護施設福祉サービス研修会に参加して

去る12月3日に霞ヶ関で全国の救護施設に従事する職員が集まる「救護施設福祉サービス研修会」が行われ、ふるさと会の佐久間理事長が講師として招かれました。当日は、立正大学の蟻塚昌克先生の「昨今の貧困、生活保護の現状と課題」という講義から研修会が開始。古典経済学から始まる貧困に対する定義から始まり、生活保護法ができるまでの社会保障の流れ、戦後から現代にいたる社会福祉の発展などが話されました。その話を受け、地域における自立支援の取り組みの一例としてふるさと会が紹介され、佐久間代表理事からふるさと会の全体的な事業内容をお話させていただきました。

当日参加された救護施設関係者の方達が、施設の中での支援に完結せず、地域の社会サービスと連携することを前提として利用者の生活を支援するふるさと会の活動内容について、興味深く聞かれている姿が印象的でした。また救護施設や厚生施設ではなくても、多くの貧困層に対して、新たな希望の道を示すうえでも今後ふるさと会が果たしていく役割が大きいと実感した一日でありました。
(崔曙哲)



3.上野動物園にて

11月18日地域生活支援センターすみだで毎月行われているイベントに参加してきました。

このイベントの前日は雨で朝も曇りでしたが参加者の集合時間には晴天に恵まれました。この日の参加者は計36名。ほとんどの方が地域生活支援センター「すみだ」に集合し、残りの方は現地集合でした。現地に集合された方の中には集合時間の1～2時間前には集合場所に到着した方もおり、この日のイベント参加をとても楽しみにされていたことがよくわかりました。センターすみだに集合された方はバスを利用して上野動物公園を目指しました。

昼食後に記念撮影を撮りその後、園内へ。2時間という短い時間でしたが皆さんたくさんの動物を見て楽しめました。ちょうど紅葉も綺麗な時期で、皆様は楽しそうに動物をごらんになったり、景色を楽しまれたりしました。

普段は施設の仕事をしている私が地域で暮らしている方とお話をする機会を持って、とても楽しい一日でした。地域で独り暮らしをしていると、色々な方とこうして出掛けたり、お話をすることが少なくなったりしがちですが、こういった行事に参加することで新しい出会いが生まれます。地域で生活していく上でとても大切な行事だと感じました。

(嶋田久美子)



バスを待つ参加者のみなさん 談笑をしながらバスを待ちました 昼食風景



少し疲れたと休憩をされています

4.大阪研修に行きました！

12月1日から3日の3日間、大阪研修に行ってきました。当会で就労支援、地域生活支援、介護事業、自立援助ホームに携わる5名の職員が参加しました。主な研修スケジュールは次のとおりでした。(1日目)西成労働福祉センター、NPO釜ヶ崎支援機構、技能講習事業所、西成労働福祉センター、大阪市更生相談所、三角公園。(2日目)西成労働福祉センター、救護施設今池平和寮。(3日目)ウェルフェアマンション「おはな」。

疾病などの困難を抱えた人たちに対する日常生活の支援や仕事をしたいけど仕事がない人々に対する就労面での支援の様子を様々な団体の活動を通じて学ばせていただきました。

NPO釜ヶ崎支援機構の山田理事長からは自転車のリサイクルを通じた就労支援の現場をご案内いただきました。「作業に当たっている皆さんにはそれぞれのこだわりがあり時間がかかるので大変だ」とご苦労されている様子でしたが、自転車の出来上がりは大変良いそうです。働く上で賃金だけではなく生き甲斐ということも重要なのだと強く感じました。

救護施設今池平和寮では施設内での支援だけではなく訪問活動や通所事業などのご紹介をいただきました。高齢化の問題だけではなく、最近では薬物やアルコールによる依存症を抱えた若年者の問題も顕在化しているとのことでした。そうした困難を抱える人たちが再び地域で安心して生活できるように今池平和寮では地域の協力を得ながら支援を続けていることが強く伝わってきました。

東京から来た私たちにとって大阪で強く感じることは、大阪が元気だということです。早朝の西成労働福祉センターでは日雇労働に携わる労働者と手配師との活気あるやり取りの様子や路上での日用品の売り買いの様子が印象的でした。こうした街の雰囲気や人々の気質も人が生きていくうえで大切な元気の源なのだろうと感じました。

2日には、(株)C・D・Rがコミュニティハウス荻の開設記念として開催した「1人暮らし高齢者多住地域の住まいと福祉」と題したシンポジウムに参加し、様々な議論に触れることができました。同シンポジウムは、富田一幸氏(株)C・D・R代表取締役)の司会で、水田恵(当会代表)、摺木利幸氏(社会福祉法人ヒューマンライツ福祉協会理事長)、田岡博行氏(株)権総合プランニング代表取締役)、米野史健氏(大阪市立大学都市研究プラザGCOE博士研究員)の4名により、支援、住まい、まちづくりに関して、それぞれの立場からの講演がありました。コミュニティハウス荻からは、高齢者や要介護の方でも住める安心で良質な住居を提供したいという説明がありました。講演では当会が制度化を目指す支援付き住宅やヒューマンライツ福祉協会のエンアパートメント等の説明がありました。また、応急支援から継続支援へとニーズが変化していることが強調されていました。

大変お忙しい中、お時間を割いて研修にご協力いただきました皆様には心から感謝申し上げます。学んだことを日々の活動に是非とも活かしていきたいと思えます。

(山形 他参加者一同)

発行元: 特定非営利活動法人 自立支援センターふるさとの会

〒111-0031 東京都台東区千束4-39-6

TEL: 03-3876-8150 FAX: 03-3876-7950

E-mail: hurusato@d5.dion.ne.jp

HP: <http://www.d5.dion.ne.jp/~hurusato/>